

優秀賞

Belief

福島県立会津学鳳高等学校 2年 平子 七海

たとえば、風が一瞬強く吹いたとき。蝶々が私の後を追うとき。木の葉の揺れる音がしてふと空を見上げたら、雲の奥に一筋の光が見えたとき。木の葉の揺れる音がしてふと空を見上げたら、雲の奥に一筋の光が見えたとき。会ったことのない祖父の影を、いつもどこかですつと探してしまう自分がいる。

ある日、私の部屋の奥に埋もれていた腕時計を見つけた。銀色のその腕時計は、私が生まれるよりも十年以上前に亡くなった祖父のものであった。

私は、その腕時計の止まった針を必死に直した。この腕時計が動いたら、祖父に会えるような感覚があったから。話したことのない祖父とこんなにも会いたいと願うのはなぜだろう。もしも今祖父が生きていたら、つて考える。この世にはない祖父の存在をいつも追い求めている。

私と祖父の間には、生者と死者との「会えない壁」があるということを受け入れなければならぬのは、生きる者としての宿命だろう。

それでも時々、その壁を越えたくなるー。

この世の誰もが大切な人を亡くし、そのたびにもう一度会いたいと願う。でも私たちは、会えないということ、厚い壁があることを思い知る。

それはきつと、死を克服すること。ということ。

今まで誰にも話したことのない祖父、祖父に対する私の想いが、こうして言葉にすることで、死者と私たちとの間に存在する「壁」を越え、輝きを放つ希望となって祖父のもとに届いてほしい。

高校教師だった祖父が最後に勤めた学校が、現在私が毎日通う学校であるのと知ったのはつい最近のことだった。私は毎日必ず、祖父が遺した腕時計をつけて登校する。つらいとき、悲しくなったとき、胸が張り裂けるような不安に押しつぶされそうなとき、私は腕時計を強く握りしめる。祖父が、「壁」を越え、私の背中をそつと押ししてくれるのを感じる。